

## 古代日韓における有蓋台付椀の製作と展開 －百済泗泚期の資料を中心に－

小田 裕 樹

- I. はじめに
- II. 百済における有蓋台付椀に関する研究史
- III. 問題の所在
- IV. 泗泚期有蓋台付椀の製作技法とその特質
- V. 古代日韓における有蓋台付椀の展開と特質
- VI. まとめ

**要 旨** 本稿では、日本古代の「律令的土器様式」の成立において影響が強いと指摘される、百済泗泚期の有蓋台付椀を対象として製作技法の分析をおこない、百済・新羅の都城出土土器と日本の土器との比較から、有蓋台付椀の受容にみられる共通点と相違点について検討した。

泗泚期の有蓋台付椀を観察した結果から、まず粘土紐を積み上げて球体を作り、蓋部・身部に分割してそれぞれを作り上げた後、再度組み合わせて仕上げ調整をおこなって完成させる、という製作工程が復元できる。このような有蓋台付椀の製作方法は、製作者および注文者、そして供給先の使用者が、「蓋・身一体の組み合った形」に意味を見出し、この形態を得るために最も効率的な製作技法を選択した結果であると考えられる。そして、この蓋・身が組み合った形態とは、仏器である金属製の鉢を模倣した可能性が高いと考えた。

7世紀代の日本・百済・新羅の土器をみると、いずれも有蓋台付椀を主体とする食器構成へ転換する。中国に由来する饗宴・儀式の場での食事に関わる共通の礼法を各国が受容したことと関連して、台付食器を台の上に置き、箸・匙を使用して食べる共通の食事作法が各国に伝わり、受容されていたことを示す可能性が高いと考えた。

その一方で、「金属器をより忠実に模倣した百済」、「印花文により器面装飾を施した新羅」、「土師器と須恵器を交えた日本」と、各国の食器の視覚的要素に独自性が現れていることを見出した。共通の食事様式・食事作法を受容しながらも、各国の独自の論理によって食器の形や構成などの諸要素が選択・付与されていたことが考えられる。

キーワード 有蓋台付椀 風船技法 食器構成 視覚的要素 比較研究

## I. はじめに

古代日本における飛鳥時代の土器様相をみると、大きく2つの画期がある。1つは6世紀末～7世紀初頭の金属器指向型の土器様式の成立、2つ目は7世紀後半の「律令的土器様式」の成立である。

このうち、筆者は「律令的土器様式」の成立について、丸底食器主体の食器構成から台付・平底食器主体の食器構成への転換がその本質であり、台付・平底食器の定着は、食器を台に置き箸・匙を使って食事を口に運ぶ食事作法の受容を意味すること、また台付・平底食器主体の食器構成は中国・朝鮮半島で既にみられる様相であることから、古代日本が大陸風の食事様式を受容したことを意味していると考えた<sup>1</sup>。

しかし、以上の仮説はあくまで形態の類似という視点からの検討にすぎず、日本の食器と中国・朝鮮半島の食器がいかなる関係にあるのかについては十分な検討ができていなかった。

本稿では、「律令的土器様式」の成立において影響が強いと指摘される、百済泗泚期の有蓋台付椀を対象として、製作技法の観察・復元をおこない、百済・新羅の都城出土土器と日本の土器との比較から、有蓋台付椀の受容にみられる共通点と相違点について明らかにする。これらの検討により、古代東アジアにおける日本の「律令的土器様式」の位置づけについても考察をおこないたい。

## II. 百済における有蓋台付椀に関する研究史

### 1. 泗泚期の土器様式について

泗泚期とは、百済の政治的中心が熊津城から泗泚城へと移った538年から、唐・新羅連合軍により滅ぼされる660年までをいう。泗泚期の土器研究については、金容民<sup>2</sup>、金鐘萬<sup>3</sup>、朴淳發<sup>4</sup>、山本孝文<sup>5</sup>らの研究がある。これらの研究により、泗泚期には、漢城期・熊津期の主要器種であった三足杯などの杯形土器が少なくなり、6世紀末から7世紀初頭には台付椀を主体とする土器様式が成立することが明らかにされている。特に、王宮址と推定される扶余官北里遺跡などの都城中枢施設でみつかる精製の有蓋台付椀（灰色土器）は、規格性や法量分化の存在を特徴とし、支配者階層の生活・儀礼容器として定着すること、百済における古代国家の形成・成熟と深く関わることなどが指摘されている。

### 2. 泗泚期の有蓋台付椀の製作技法について

百済泗泚期を特徴づける有蓋台付椀の製作技法については、一体成形とする説と型作りとする説の2説が提起されている。金容民は有蓋台付椀の蓋と身が歪みなく正確に一致することから、球形を作った後に中央部を切断して蓋・身のそれぞれを作り上げる方法を考

えた<sup>6</sup>。一方、金鐘萬は灰色土器有蓋台付碗の規格性と大量生産について、型（範）作りを用いたものと解釈し<sup>7</sup>、蘇哉潤も、型作りによって蓋・身を成形した後に、両者を合わせる方法をとったと考えた<sup>8</sup>。これに対し、酒井清治は、碗の底部内面に残る小穴を密閉閉塞による収縮および乾燥促進のための空気孔と解釈し、有蓋台付碗が風船技法によって製作されたとした<sup>9</sup>。金鐘萬は、酒井清治の指摘を受けて型作り説を撤回し、風船技法と同様に内部の空気圧を利用した叩き技法による製作であるとし、三国時代の土器製作に用いられた透刻技法の一種であるとみて、球切技法の名称を与えた<sup>10</sup>。

有蓋台付碗の製作にこれらの技法が採用された背景について、型作り説は台付碗の規格性と大量生産のためとし<sup>11</sup>、一方の一体成形説でも、規格性の高い台付碗を効率的に大量生産するため<sup>12</sup>と解釈している。

### Ⅲ. 問題の所在

百済泗泚期の土器様式について、この時期に台付碗を主体とする土器様式が成立することが明らかにされている。特に有蓋台付碗は泗泚期の食器構成の中で主体を占める土器であり、規格性をもつこと、法量分化がみられること、特徴的な製作技法により製作されていることが明らかになっている。

しかし、有蓋台付碗の製作技法について、一体成形説と型作り説の2説が提示されており、再度筆者なりに資料の観察をおこない製作技法を明らかにする必要がある。また本稿で述べるように、筆者は一体成形説をとるが、なぜ風船技法（球切技法）による一体成形方法を採用する必要があったのか、その意義を明らかにする必要がある。

さらに、有蓋台付碗形態の土器は、7世紀前半の新羅や7世紀後半の日本など近隣諸国でも近い時期に食器構成の主体を占めるようになることから、これらの土器様相と比較したうえで、百済の有蓋台付碗の特質を評価する必要がある。

以上の問題意識のもと、本稿では百済泗泚期の有蓋台付碗の観察から製作技法を復元し、百済における有蓋台付碗製作の特質を明らかにする。またこれらの検討をふまえ、百済・新羅と日本の都城出土土器の比較から、有蓋台付碗の受容にみられる共通点と相違点を明らかにする。そして、古代東アジアにおける日本の「律令的土器様式」の位置づけについても考察を進めたい。

## Ⅳ. 泗泚期有蓋台付碗の製作技法とその特質

### 1. 有蓋台付碗の観察

#### (1) 国立扶余博物館所蔵扶余莘岩里遺跡出土有蓋台付碗の観察

本資料は国立扶余博物館が所蔵する扶余莘岩里遺跡出土の火葬骨蔵器である（第1図）。

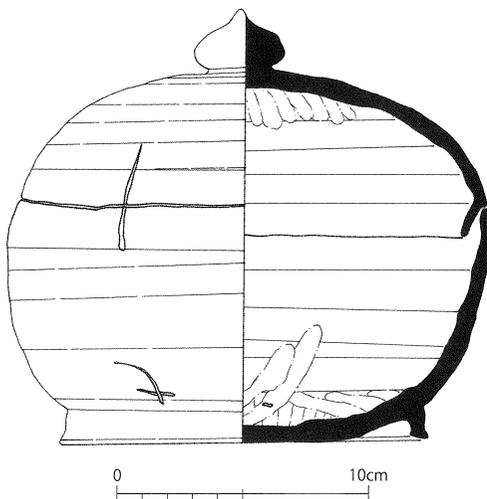
これは食器として使用されたものではないものの、蓋・身のセット関係が確実な泗泚期の有蓋台付椀であり、蓋・身両方にまたがる成形・調整痕跡の観察が可能という点で、非常に高い資料的価値をもつ。

本資料については、既に酒井清治の検討により、製作過程の復元案が示されている<sup>13</sup>。筆者も国立扶余博物館の許可を得て、2013年8月に実見・観察する機会を得た。その観察結果を示す。

**身の観察と製作痕跡** 身は口径18.5～18.8cm、器高9.2～9.7cm、高台径は14.2～14.5cmである。半球形の形態で、丸底気味の底部からやや内湾しながら口縁部が立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部外面外寄りに、高く外側に踏ん張る高台を貼り付ける。

次に製作技法に関する痕跡について記述する。本個体の底部外面を観察すると、ロクロ削り調整により、砂粒が時計回りの方向に動いた痕跡が認められる。このことから、本個体の製作において、反時計回りのロクロを使用したと考えられる。これを前提として、器面の砂粒が動いた痕跡等の観察から、土器が正立・倒立のいかなる状態で調整を施したかについて判断した。

体部内外面にロクロナデ痕跡が残るが、外面を観察すると、縦方向の平行叩きを施した後に、丁寧なロクロナデ調整を施している。また、体部外面下半にロクロ削りを施す。これは底部外面から続く一連のもので、倒立状態でロクロ削りをおこなっている。底部外側に高台を貼り付けるが、酒井清治が指摘した通り、高台の位置が空気抜きの小穴（空気孔）を隠す位置にあたる<sup>14</sup>。底部内面をみると、体部のロクロナデ調整の後、まず中心付近に一方ナデを施し、次にその周囲を4～5回に分割してナデを施す。空気孔を消すナデはこれらの分割ナデよりも器面の乾燥が進んだ状態でおこなわれており、強い力を入れてお



第1図 国立扶余博物館所蔵有蓋台付椀 1 : 3

こなうが、完全には消すことができず、粘土が盛り上がったまま残る（第2図④）。体部外面下半には「七」の刻字があり、これは倒立した状態で記している。

**蓋の観察と製作痕跡** 蓋は外口径が18.4～18.8cm、かえり径が17.1～17.4cm、器高は8.9cmで、蓋・身を組み合わせた器高は17.3cmとなる。半球形の形態で、頂部から口縁部が丸みを持って緩やかに降る。口縁部内面に内傾するかえり

を貼り付ける。かえりは口縁端部の身を受ける部分にはかからないように、やや内側に貼り付ける。頂部に大ぶりの宝珠形つまみを貼り付けるが、中心から少しずれた位置にある。頂部は丁寧なロクロナデ調整が施されている。つまみを貼り付けた際のナデが、このロクロナデ調整により消されていることから、つまみの貼り付けよりも後に頂部の丁寧なロクロナデ調整が施されたものと考えられる。

内面はロクロナデ調整を施す。断面をみると、頂部付近に厚みが増す部分があり、そこを境として頂部中心にかけて、ロクロナデ調整とは異なるナデ調整を施している。このナデ調整は基本的に一方向で、その周囲に一部、方向の異なるナデ調整を施す。

**蓋・身にまたがる製作痕跡** 本資料は蓋・身のセット関係が確実な個体であり、両者を組み合わせて観察したところ、蓋・身両者にまたがる調整痕跡が残ることが分かった。

まず、蓋・身の口縁部は水平ではなく、やや斜行しており、この斜行した部分とそれを水平方向に修正するように小さな段差ができる場所が少なくとも2～3か所で観察できる。そして、この段差は蓋と身で対応している（第2図①）。これは、まず球体をつくり、その後蓋・身に分割する際に、ヘラ工具を用いて切断した痕跡と考える。すなわち、球体を分割する時に、ヘラ工具を水平方向に入れるが、一周を一気に切断するのではなく、ヘラ工具の水平位置を修正しつつ、一周を何回かに分割して切断しており、その結果、段差が生じたものと考えられる。

次に、蓋・身の口縁部外面のナデ調整に注目する。蓋・身の合わせ目付近の幅約3cmの範囲でロクロナデ調整の痕跡が観察できる。これは蓋・身にまたがって連続して施されており、蓋・身を組み合わせた後に口縁部外面に施した調整の痕跡である（第2図②・③）。このロクロナデ調整が施された範囲を観察すると、器面の微砂粒が動いており、黒色粒子が墨流し状に移動している痕跡がみられる。これらは、他の外面ロクロナデ調整の痕跡とは異なる特徴であり、器面の乾燥が進んだ段階での調整と考えられる。蓋・身を再度組み合わせた後に、3～4cm幅の水にぬらした皮などを用いて、乾燥が進んだ器面にナデ調整を施したものと考えられる。このナデ調整は、蓋・身を分割した後、それぞれの成形・調整や乾燥などの過程で生じた蓋・身の口縁部の歪みなどを最終的に調整する目的で、再度蓋と身を組み合わせた後に施されたものとする。本稿では、このナデ調整のことを「仕上げナデ」と仮称する<sup>15</sup>。

この仕上げナデを施したのちに、鋭利な工具を用いて身・蓋にまたがる合印を下から上に刻む。

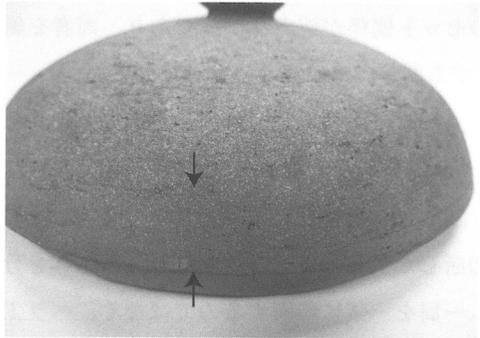
**風船技法による製作** 以上の「蓋・身に対応する切断痕跡」と「蓋・身にまたがる仕上げナデ調整」の存在から、この有蓋台付椀はまず粘土紐を積み上げて球体を作り、ヘラ工具で蓋部・身部に切断・分割し、それぞれ調整を施した後、再度組み合わせて仕上げ調整を



① 蓋・身口縁部に対応する段差



② 蓋・身にまたがる仕上げナデ調整



③ 蓋外面の仕上げナデ調整



④ 身内面の小穴とナデ調整



⑤ 蓋頂部内面の調整（円盤閉塞）



⑥ 蓋頂部内面の調整（回転絞り閉塞）



⑦ 身口縁部の仕上げナデ調整



⑧ 身口縁端部の溶着痕

第2図 百済有蓋台付碗の細部写真

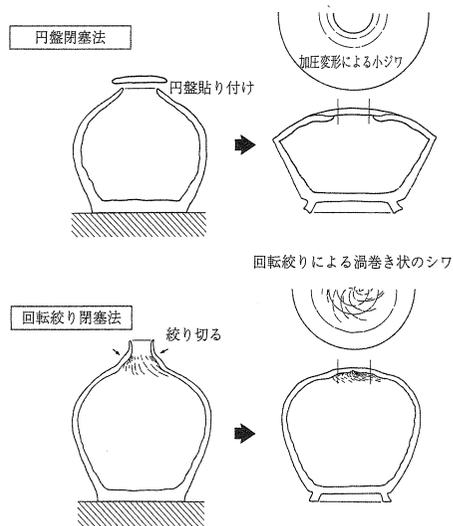
おこなうことで完成させたことが分かる。筆者は、酒井清治が指摘した空気孔の存在もあわせて、泗泚期有蓋台付椀は風船技法（球切技法）を用いた一体成形によって製作されたものと判断する。

(2) 官北里・軍守里遺跡出土有蓋台付椀の観察

国立扶余博物館所蔵資料の観察から予想された製作技法・順序をふまえ、各遺跡出土台付椀資料の観察から、製作に関わると考えられる痕跡を残す事例を紹介する。

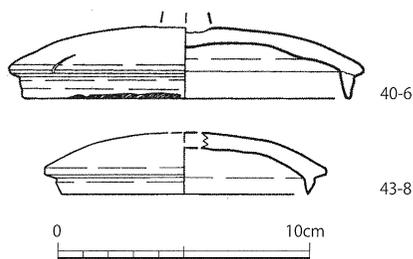
**円盤閉塞の痕跡** 泗泚期有蓋台付椀が風船技法による製作とした場合、閉塞方法についても検討する必要がある。風船技法の閉塞方法には、円盤閉塞と回転絞り閉塞の2種類があることが北野博司により、指摘されている<sup>16</sup>（第3図）。

軍守里40-6例（第2図⑤・第4図）は円盤閉塞の可能性をもつ有蓋台付椀蓋である<sup>17</sup>。頂部内面をみるとロクロナデ調整とは調整および器表面の状態が明らかに異なり、器面の乾燥が進んだ状態で不整方向のナデ調整が施されている。これは粘土紐を積み上げて成形しロクロナデ調整を施した部分と、閉塞してロクロナデ調整がおこなえず分割後にナデ調整を施した部分との調整の違いが生じたことを示す。また、断面図をみると、頂部よりやや下がった部分に器壁の厚みに差が生じて段が付く部分がある。この部分と、調整が異なる境とが対応している。これは、粘土紐を積み上げた体部と、円盤閉塞の粘土との段差を反映していると考えられる。泗泚期の有蓋台付椀蓋には、このような断面をもつ個体が多く認められるため、円盤閉塞による閉塞方法が多かったものと考えられる。



第3図 風船技法における閉塞方法模式図

**回転絞り閉塞の可能性をもつ痕跡** 軍守里43-8例（第2図⑥）では、上記の痕跡に対して、内面の斜行する筋が認められる。これは回転絞り閉塞によって生じた粘土の皸に由来する可能性がある。閉塞方法の差異については、器形の大小に



第4図 軍守里遺跡出土有蓋台付椀蓋

よる差異や製作工人・工房の差異と関連する可能性があり、より詳細な観察を踏まえたさらなる検討が必要である。

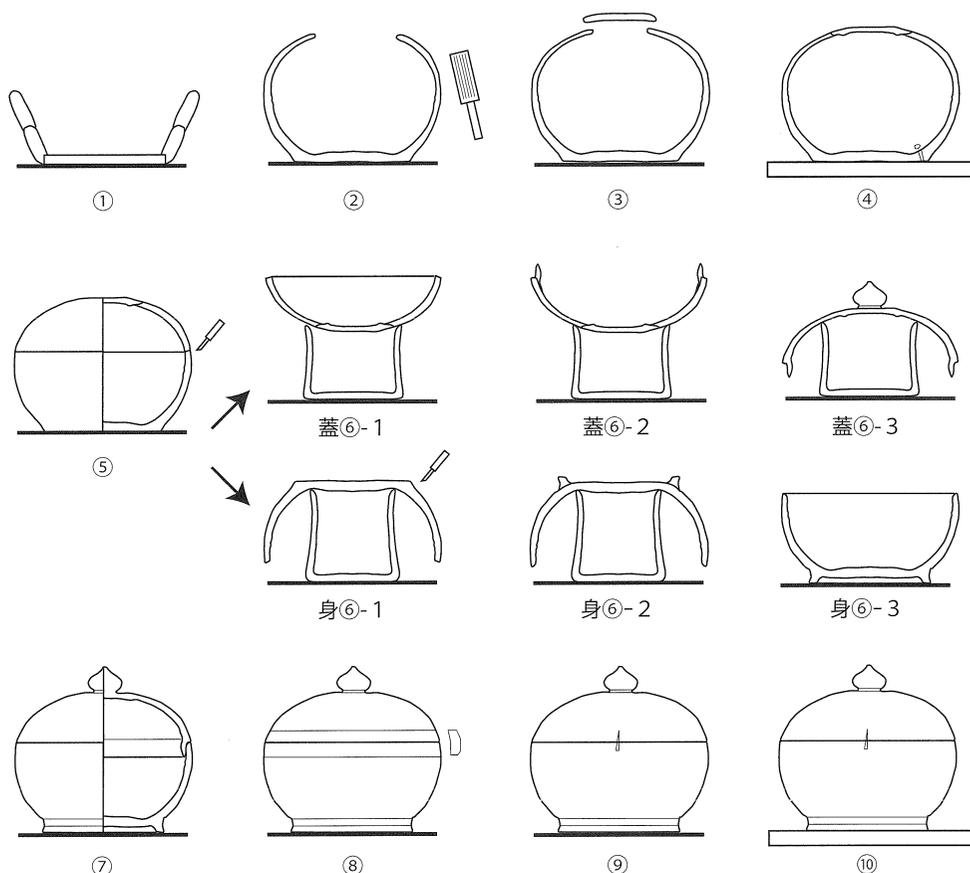
**口縁部の仕上げナデ調整** 官北里3826<sup>18</sup>例（第2図⑦）は、身口縁部の仕上げナデ調整を示す。他のナデ調整痕跡とは異なり、砂粒が動き、削り痕跡のようにみえる。これは、器面の乾燥が進んだ状態で仕上げナデ調整が施されたため生じた痕跡と考える。この仕上げナデ調整は、口縁端部外面のみで途切れ、口縁端部上面や口縁部内面には連続しない。

**蓋・身を組み合わせた状態での焼成** 官北里3845例（第2図⑧）は、蓋口縁端部に身口縁部が溶着している。これは蓋・身を組み合わせ、蓋と身の口縁部が密着した状態で焼成されたことを示す。

## 2. 泗泚期有蓋台付碗の製作工程の復元

以上の各資料の観察から想定される台付碗の製作工程は以下のとおりである（第5図）。

- ① 粘土円盤で底部を形作る。その上に粘土紐を積み上げる。
- ② 粘土紐を上方まで積み上げる。体部の成形に際して、平行叩きを施す。その後、叩き痕跡を消すように内外面にロクロナデ調整を施す。このとき頂部付近は開口している。
- ③ 頂部に粘土円盤を詰め、閉塞する。回転絞りによる閉塞の可能性もある<sup>19</sup>。
- ④ 閉塞した球体の状態で半乾燥させる。乾燥時の収縮を調節するため、刺突により空気孔を開ける。
- ⑤ 球体をヘラ工具により切断し、蓋部・身部に分割する。
- ⑥ 蓋部と身部分けて製作を進める。このときシッタ<sup>20</sup>を使用したと想定される。  
蓋⑥-1 反転し、倒立状態にする。頂部内面に不整方向のナデ調整をおこない、閉塞痕跡を消す。  
⑥-2 口縁部内面にかえりを貼り付ける。  
⑥-3 反転して正立状態に戻し、つまみを貼り付ける。頂部外面にロクロナデ調整を施す。  
身⑥-1 反転し、倒立状態にする。底部外面にロクロ削りを施す。  
⑥-2 高台を貼り付ける。  
⑥-3 正立状態に戻し、底部内面に不整方向のナデ調整を施して、空気孔を消す。
- ⑦ 蓋と身を再度組み合わせる。
- ⑧ 蓋・身の接合面に仕上げナデ調整を施し、口径があうように調整する。
- ⑨ 合印を入れる<sup>21</sup>。
- ⑩ 正立状態で乾燥させる。
- ⑪ 蓋・身を組み合わせた状態で焼成する。



第5図 百濟有蓋台付椀の製作工程復元案

### 3. 百濟における有蓋台付椀製作の特質

以上のように有蓋台付椀の製作工程を復元した。これは酒井清治の観察結果および製作工程復元案を概ね追認するものである。

さて、一連の製作工程をみると、有蓋台付椀の「蓋・身が一体のセットをなす形態」を得るために多大な労力が払われている点が注目される。球体を切断して蓋・身を別々に作り上げ、再度組み合わせて仕上げる工程は、最初から蓋・身を別々に製作する方法に対して、効率的な土器製作とはいえない。筆者は、この製作技法をあえて採用した理由は、「蓋・身が一体のセットをなす有蓋台付椀形態を得る」という目的に最も適した方法であったからと考える。すなわち、蓋・身を別々に製作し最後に組み合わせて調整する方法よりも、頂部を閉口し中空の球体を一旦作り、それを分割して製作し、再度組み合わせて微調整をおこなう方が、より効率的に蓋・身一体の有蓋台付椀形態を得ることができるためであると考える。

北野博司によると、風船技法には2つの目的があるとする<sup>22</sup>。第一は胴頂部が開口しな

い中空の器形を作る場合で、多くは上部を閉塞した後に胴部の一部を切り取り、別作りの口頸部などを貼り付けるものである。第二は、乾燥段階をはさまないと成形が困難な器形を作る場合で、胴部を一旦風船状態にし、内部の空気圧を利用しながら加圧変形させることで連続的に成形するものである。北野は須恵器を例に、横瓶は第一の目的が主で第二の要素ももつ、提瓶と平瓶は両者の目的で、長頸瓶は後者の目的によるとした。筆者は、百済における有蓋台付椀の製作技法は上記のうち、第一の目的を主として選択されたと考える。

また、この技法で製作し、蓋・身を合わせた状態で焼成することにより、蓋・身の収縮・焼け歪みがほぼ同じになることから、別個体の蓋・身とは組み合わせず、同一個体でも合印の場所を除くと蓋・身が正確に組み合わない。これは、ある個体が別の個体との互換性をもたないことを意味し、風船技法を用いて製作された有蓋台付椀は、製作段階から既に「使用の場における蓋・身の一対一関係」を規定している。このことから、「有蓋台付椀の蓋・身一体のセット関係」の重要性が、製作者および注文者、使用者の間で共通して認識されていたことが窺える。

以上の検討から、百済の有蓋台付椀製作の特質とは、蓋と身が組み合った形を得るために、最適な製作技法の選択と多大な労力が払われている点にあり、製作者および注文者、そして供給先の使用者が、この有蓋台付椀形態に意味を見出し、共通認識となっていたことが考えられる。

百済泗泚期の人々にとって有蓋台付椀とは、似たような口径の蓋と身を適当に組み合わせて使うような単なる蓋付きの食器ではなく、一対一関係にある蓋と身が組み合わさった形そのものに意味があり、その形を得るために製作者は最も効率的な製作技法を選択して製作し、使用者はその意味を意識しつつ食事をおこなっていたものと推察される。

## V. 古代日韓における有蓋台付椀の展開と特質

### 1. 百済泗泚期の有蓋台付椀の祖形

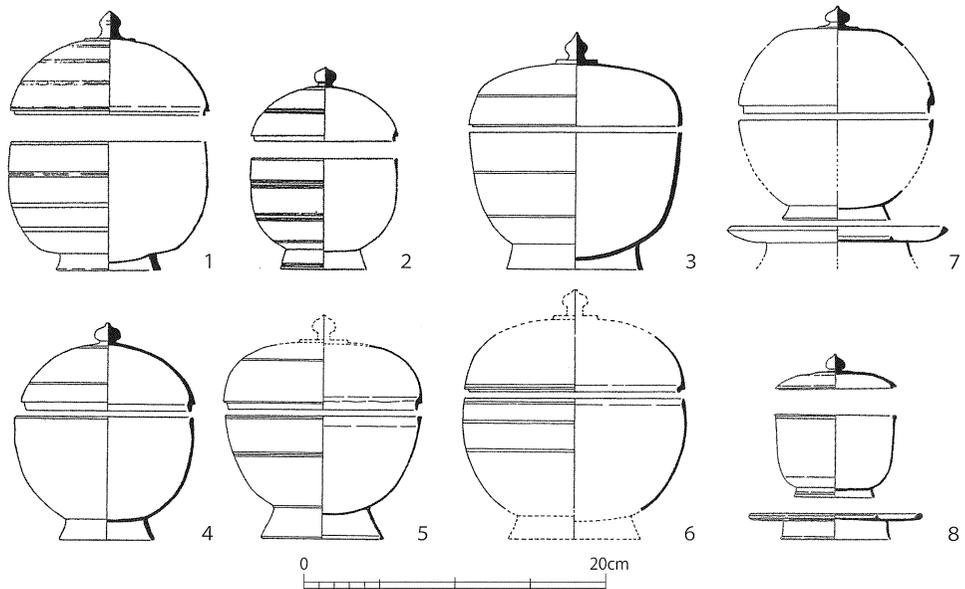
以上のように、百済泗泚期の有蓋台付椀が、「蓋・身一体の組み合った形態」を得ることを目的として製作されていたことを明らかにした。では、このような泗泚期有蓋台付椀の蓋・身一体の形態とは何を意味するのか、この点について検討したい。

有蓋台付椀の形態について、中国に由来する金属器または陶磁器を模倣し、製作したものとする見解がある。金容民は、中国製の陶磁器や銅製盒の影響を受けたとし、直接的には高句麗の土器や青銅器との関係を考える<sup>23</sup>。金鐘萬は中国製陶磁器および銅製品の影響とした<sup>24</sup>。山本孝文は、百済では漢城時代に中国製陶磁器の椀形容器が出土し、熊津時代には公州武寧王陵などから中国製の青銅製椀が出土しており、これらの陶磁器や金属器を

模した初期台付椀の製作が遅くとも熊津時代までには百済内部で開始されていたことを指摘し、これらをモデルとした可能性を考える<sup>25</sup>。酒井清治は風船技法を含めた百済泗泚期の高度なロクロ技術との関連から、台付椀は従来の百済土器の系譜の上に、中国からのロクロ技術が導入されて作られたものと想定し、台付椀の器形は金属器模倣ではなく、中国の器形を指向したとする<sup>26</sup>。

これらの説では、有蓋台付椀のうち身部分の形態に注目し、金属器だけでなく陶磁器を模倣した可能性に言及している。しかし、本稿で明らかにしてきたように、泗泚期の有蓋台付椀は蓋と身の組み合った形態を重視している。中国の陶磁器をみると、高台のつく椀は同時代に普遍的に存在するが、これらは基本的に無蓋器種であり、蓋を組み合わせる「有蓋台付椀」はほぼ存在しない。この点において、泗泚期の有蓋台付椀が中国陶磁器を模倣したものとは考え難い。

筆者は百済泗泚期の有蓋台付椀は中国の陶磁器ではなく、金属製の椀を模倣したものと考える。泗泚期の有蓋台付椀の祖形となった金属器については、毛利光俊彦の分類する高台付椀 A 類<sup>27</sup>および、桃崎祐輔が報告した茨城県かすみがうら市風返稻荷山古墳出土銅椀例<sup>28</sup>などを候補に考えている（第6図-3~8）。毛利光分類の高台付椀 A 類は、朝鮮半島でみると、百済で公州武寧王陵から身が出土しているほか、晋州水精峯2号墳や新羅の慶州皇龍寺西金堂でも出土している（第6図-1・2）。



1：晋州・水精峯2号墳 2：慶州・皇龍寺西金堂 3：千葉・金鈴塚古墳 4：神奈川・登尾山古墳  
5：静岡・中石田古墳 6：千葉・殿塚古墳 7：長崎・保床山古墳 8：茨城・風返稻荷山古墳

第6図 朝鮮半島・日本出土の銅椀

このような蓋・身を組み合わせるとなると盒形態となるような金属製の鉢を模倣して有蓋台付椀が製作されたものとする。そして、これらの金属製鉢が、主に仏器として使用されたと考えられる点も重要である<sup>29</sup>。泗泚期の百済では王室・中央貴族層を中心に仏教が興隆していたことが明らかにされている<sup>30</sup>。仏器である金属製鉢を忠実に模倣した有蓋台付椀が泗泚都城や王宮里遺跡など百済泗泚期の都城中枢施設を中心に出土することから、これらの施設における食事の場<sup>31</sup>においても、仏教の影響を強く受けていたことが分かる。

## 2. 古代日韓における有蓋台付椀の共通性

### (1) 日本における「律令的土器様式」

日本では7世紀後半に土器様式の画期がある。当該期の土器様式について、西弘海は金属器指向を基調とし、「法量の規格性」とそれを前提とする「多様な器種分化」、「土師器・須恵器の互換性」が特徴であるとして、これらは官僚制の発展にともなう大量の官人層の出現とその特殊な生活形態を前提として理解できるものとした。そして、この土器様式に「律令的土器様式」との名称を提示した<sup>32</sup>。

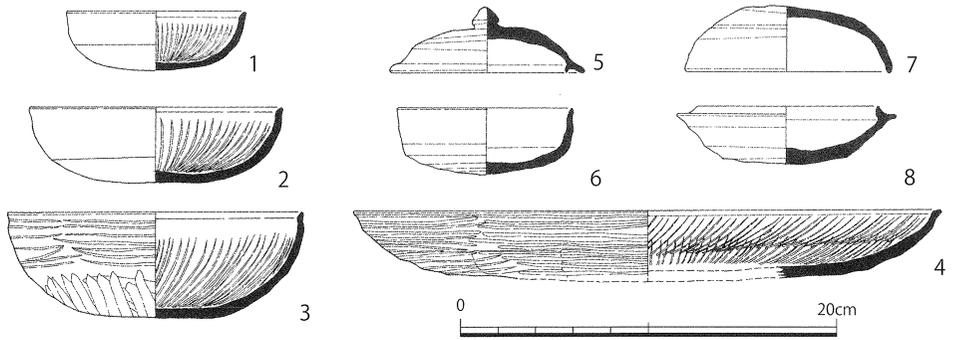
西口壽生・玉田芳英は大官大寺下層出土土器の再整理をおこない、飛鳥編年の飛鳥Ⅲの段階で器種構成＝食器様式が変化することを指摘し、これを「律令的土器様式」の萌芽的成立と評価した。また、「律令的土器様式」の成立には百済滅亡前後の百済遺民がもたらした文化的影響が考えられるとの見通しを示した<sup>33</sup>。

筆者は食器構成に注目して「律令的土器様式」成立前後の土器様相を検討した。その結果、飛鳥時代前半の食器構成は小型丸底形態の杯を主体とし（第7図）、古墳時代以来の伝統的器種と金属器模倣器種が併存する点の特徴であること、それが、飛鳥時代後半（飛鳥Ⅲ）以降、台付・平底器種主体の食器構成（第8図）に転換することを明らかにした。そして、この台付・平底器種主体の食器構成は、中国・朝鮮半島と同様の食器構成を採用したことを意味すると考えた<sup>34</sup>。

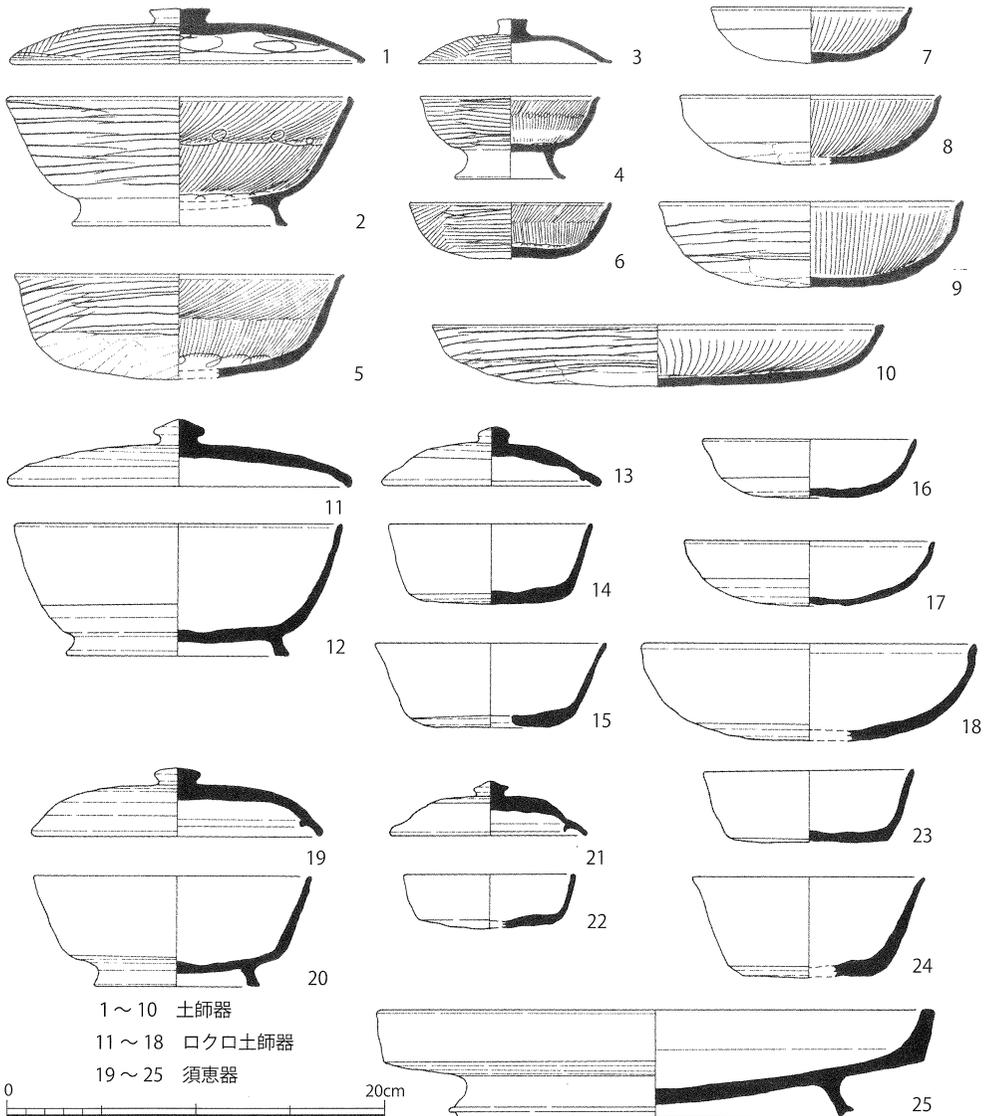
さらに、この丸底食器から平底・台付食器への変化は、城ヶ谷和広や内山敏行らの研究成果<sup>35</sup>もふまえると、食器の持ち方や置き方、箸・匙の使用など、食事作法に関わる変化である可能性が高いと考えられる。筆者は、飛鳥時代前半の土器様式では、金属器を模倣した新器種を採用しながらも、食事作法については古墳時代以来の食器を手で持つ伝統を保持したままでの受容にとどまっており、飛鳥時代後半の「律令的土器様式」の成立により、台付・平底食器を台の上に置き、箸や匙を使って食事を口に運ぶ大陸風の食事作法へ転換したと考えている<sup>36</sup>。

### (2) 古代東アジアにおける食器構成の共通性

7世紀代の百済・新羅・日本の都城出土土器をみると、いずれも有蓋台付椀主体の食器構成をとるようになる点で共通する（第9図）。これは、各国において金属製の鉢を模倣し



第7図 飛鳥時代前半の食器構成 (甘樫丘東麓遺跡 SK184)



1～10 土師器

11～18 ロクロ土師器

19～25 須恵器

第8図 飛鳥時代後半の食器構成 (大官大寺下層 SK121 出土土器)

た有蓋台付椀を台の上に置き、箸・匙を使用する共通の食事作法が受容されていたこと、各国の支配者層とその集住地域である都城を中心にまず受容されたことを示すと考える。

このように日本・百済・新羅において共通する有蓋台付椀主体の土器様式が成立する背景には、中国式の礼制の受容や整備と関連し、その一環として饗宴・儀式的場での食事に関わる共通した礼法を受容したことと関連する可能性が高いと考える<sup>37</sup>。この点は、各国の独自性について検討したのちに、再度考察する。

### 3. 古代日韓における有蓋台付椀の独自性

百済・新羅・日本における有蓋台付椀を主体とする食器構成の共通性を指摘したが、その一方で独自性もみられる。以下、各国の有蓋台付椀をはじめとする食器の独自性について検討する。

#### (1) 百済の食器にみられる独自性

本稿で明らかにしてきたように、百済では製作から使用の段階に至るまで有蓋台付椀の蓋・身一体の組み合わせさせた形態を重視する点が特徴である。日本・新羅では、蓋・身をそれぞれ別に製作し、口径の合うサイズのを適宜組み合わせ使用しているのに対し、百済では、一体成形により有蓋台付椀を製作し、使用していた。これは仏器である金属製の鉢を模倣した土器であり、新羅・日本と比較して、より忠実に金属器を模倣していると位置づけることができる。

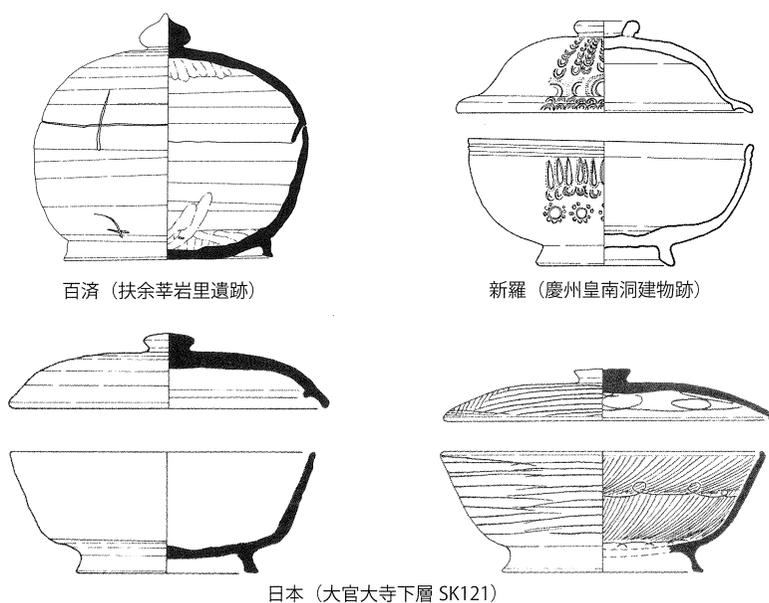
この他、百済泗泚期の土器には鍔付土器など新羅・日本にはない食器が存在しており、これらは高句麗の影響を受けたと考えられている<sup>38</sup>。

#### (2) 新羅の食器にみられる独自性

新羅では、器面を印花文により装飾する印花文土器が食器構成の中で大きな位置を占める点が特徴といえる。印花文土器は新羅の支配者層・上位層が居住する王京を中心に使用された土器であったと評価される<sup>39</sup>。

この印花文手法による器面装飾は、中国などの外界から伝わったものではなく、新羅の陶質土器工人が自発的に用いるようになった技法と考えられている<sup>40</sup>。これに対し、中国江西省の洪州窯製品をモデルとする説<sup>41</sup>もあるが、印花文により器面装飾を施す点は、百済・日本にはない新羅独自の食器の装飾表現と位置づけられる。印花文が施される有蓋台付椀の形態そのものは、金属製鉢の模倣によるものであり、百済・日本と共通する。その器面を印花文手法により装飾するという点に新羅の独自性が発揮されていると考える。

この他、有蓋台付椀の蓋のつまみが円環状つまみや輪状つまみである点も特徴的である。新羅の土器をみると壺蓋を中心に日本と同じような宝珠形つまみをもつ蓋も存在するものの、円環状・輪状つまみが主体である。7世紀以前の新羅の主要器種である高杯の蓋をみると、円環状つまみが主であり、筆者はこのような新羅の陶質土器の伝統が、新た



第9図 百済・新羅・日本の有蓋台付碗

に食器構成の主体となる有蓋台付碗のつまみ形態に影響を与えている可能性があると考え  
る。

### (3) 日本の食器にみられる独自性

日本では土師器と須恵器が並存する食器構成が特徴である。百済・新羅ともに土製の食器は須恵器に対応する陶質土器（硬質土器）のみである。陶質土器は食器・貯蔵器、土師器に対応する軟質土器は煮炊具として用いられるというように、百済・新羅では基本的に土器の機能と材質がそれぞれ対応している。これと比較すると土師器・須恵器の食器が併存する日本の食器構成は独自のものである。また、土師器は日本独自の食器であり、暗文やヘラミガキによる器面装飾方法も当該期の百済・新羅では多用されておらず、日本に特徴的な方法と考える。これらの暗文やヘラミガキによる器面装飾は、金属器の質感を表現するために採用された手法と考えられている<sup>42</sup>。

なお、重見泰も新羅土器と比較したうえで、7世紀代の日本の食器について土師器の存在が特徴的であると評価する一方、須恵器については墓への副葬品の意識から、食器類においては衰退傾向にも似た状況を呈すると評価した<sup>43</sup>。土師器が日本の土器の特徴とする点については、筆者も重見と同意見であるが、須恵器の位置づけについては異なる見解をもつ。

飛鳥地域における飛鳥時代前半（飛鳥Ⅰ～飛鳥Ⅱ<sup>44</sup>）の土器をみると、土師器杯Cと須恵器杯G・杯Hが主要器種である。飛鳥Ⅰから飛鳥Ⅱへの各器種の変遷をみると、土師器

杯Cは法量が縮小し、暗文・ヘラミガキが簡略化する傾向にあり、須恵器についても杯G・杯Hは調整の省略とともに法量が縮小する傾向にあるなど、三者の法量縮小傾向と調整の簡略化は連動している。そして、飛鳥Ⅱの段階では、土師器杯CⅢ、須恵器杯G・杯Hという小型丸底形態の杯がほぼ等しい容量となっており<sup>45</sup>、これは容量という点で「土師器・須恵器の互換性<sup>46</sup>」を達成したものと評価できる。

これらに加え、飛鳥地域では当該期の遺構において土師器と須恵器が普遍的に共伴することからも、飛鳥時代前半の須恵器の衰退という重見の見解には賛同できず、この時期の食器様式は土師器・須恵器両者を取り込んだ形で構成されている点に特徴があると評価したい。筆者は、飛鳥時代前半の土器様式とは、「須恵器・土師器による多様な小型丸底杯を主体とし、相似形をとる法量分化した大型・中型の土師器丸底杯が加わる食器構成」が特徴と考える。

この他、日本の食器は飛鳥時代後半以降に台付食器が主体とはなるが、百済・新羅に比べ平底食器の占める割合が多く、都城以外の地域では台付食器よりも平底食器が主体となる場合も多い。この背景として、食器を手で持つ日本の伝統的な食事作法が影響していると考えている。この点は日本国内の資料の分析をふまえ、今後さらに検討を深めたい。

#### (4) 視覚的要素の独自性

以上のように、百済・新羅・日本では金属製の鏡形態を模倣した有蓋台付椀を土製食器として採用するという共通点を持ちながらも、独自性がみられる。これは、「金属器をより忠実に模倣した百済」、「印花文により器面装飾を施した新羅」、「土師器と須恵器を交えた日本」とまとめることができる。

そして、これらは基本的に「見た目」、視覚的要素を中心に独自の特徴が現れていることがわかる。食器の視覚的要素に対して、各国の独自性が反映している点からは、各国が共通して有蓋台付椀という食器形態を採用しながらも、食器そのものの材質や装飾については汎東アジア的な共通の規範のようなものはなく、各国独自の論理で食器の視覚的要素を選択・付与していたと考えられる。

このような食器の視覚的要素に各国の独自性が表出する背景として、筆者は7世紀中頃から後半にかけて日本古代律令国家の形成過程にみられる、礼式・服装面で中国的な儀礼・形式を受容するという一連の唐風化政策<sup>47</sup>の文脈の中で捉えることができると考える。

筆者は特に、衣服制の展開とその特質を明らかにした武田佐知子の研究に注目している。武田は、「服制と行動様式としての礼法が、礼的秩序の具体的・可視的表現形態として不可分に結びついていた」とし、「個々の国家の服制に可視的に表象されるものこそが、各国独自の、国王を中心とする身分秩序＝礼的秩序」と理解し、「東夷内部の諸国にあって服制は、地域的共通性が必然的にもたらす類同性にもかかわらず、近隣諸国、あるいは中国に対し

でも、個々の礼的秩序が独立不羈のものであることを顕現化するために構成された、独自性を主張しうるものとして存在」するとした<sup>48</sup>。

食器様式の変化はこのような衣服制の画期・展開と軌を一にするようにみえ、その背景についても同様の脈絡で理解したい。すなわち、各国の都城出土土器にみられる視覚的要素の独自性とは、隋・唐を中心とする東アジア世界において、周辺諸国が王・臣下の関係を視覚的に表示する方式を受容したことと関連しており、食器の形や食器構成に対しても各国の伝統を継承しつつ、独自の身分秩序・身分標識の体系を表示するためにふさわしい要素が新たに選択・付与された結果であると考えられる。そして、国内においても支配者階層内部の序列化など独自の身分秩序を表現する器物として体系化されていったものと推察する。

#### 4. 古代東アジアにおける「律令的土器様式」

百済・新羅・日本の都城出土土器をみると、7世紀代の近い時期に各国が有蓋台付椀を主体とする食器構成に転換する。これは、中国（隋・唐）の礼法・食事様式の影響を受けたもので、各国が金属器に由来する有蓋台付食器を台上に置き、箸・匙を使用する共通の食事作法を受容したことを反映すると考えられる。しかし、その食器の外見的特徴には、各国の個性が表れている。これは、共通の食事様式・食事作法という枠組みの中で、使用の場における視覚的な階層性の表示方法や食器を調達する生産・需給システム、食器に対する伝統的な意識など、国内の事情に応じて取捨選択がおこなわれた結果、独自性が発揮されたものと考えられる。

日本における「律令的土器様式」成立の背景について、西口壽生・玉田芳英は百済からの影響を考えた<sup>49</sup>。「律令的土器様式」の萌芽的成立期にあたる飛鳥Ⅲの時期（660年代後半～670年代）には、古代山城の造営や国家体制の整備に百済系渡来人による影響が強かったことが明らかにされている<sup>50</sup>。このような当該期の時代背景をふまえると、土器様式の変化の背景に百済の影響を想定することは可能である。

しかし、本稿でみたように、製作技法という点では、百済と日本では有蓋台付椀（杯B）の作り方が大きく異なり、直接的な影響は認め難い。むしろ蓋・身を別々に製作する点では、新羅と日本が近似すると評価できる。また、土器の規格化・法量分化や供膳具を中心とする多様な器種分化という特徴は、百済のみならず新羅でも認めることができ、これらは隋・唐の食事様式が周辺国へ広まる中で、同様に影響を受けたものと捉えられる。また、日本の有蓋台付椀（杯B）の製作技法について、飛鳥Ⅲの内面にかえりをもつ須恵器杯B蓋の製作が、前様式の杯G蓋の作り方を踏襲したとみられる例も存在することから<sup>51</sup>、「律令的土器様式」成立直後の杯Bは、飛鳥時代前半の製作技法の延長として製作されたものと捉えることもできる。「律令的土器様式」の成立において、中国（隋・唐）の礼法や食事様式

といった理念や有蓋台付椀の製作・調達に関わる技術や供給体制をどのような経緯で採用したのか、現時点では断じ難い。

筆者は、「律令的土器様式」の成立とは、隋・唐に由来する食事様式の受容を反映し、中国・朝鮮半島の影響を受けて台付・平底食器主体の食器構成へと変化したものと捉えている<sup>52</sup>。本稿の検討をふまえると、東アジアにおける「律令的土器様式」とは、「日本的な身分秩序を独自に表現する」意味合いも含んでいたものと評価でき、前様式から続く伝統的な器種や金属器を模倣した新器種を再編成して、新たに創出された土器様式であった位置づけられる。

また、土器様式の転換は、当該期の土器生産体制（土師器・須恵器ともに）に規定されるものであり、実際に国内で食器を調達する体制をどのように整備したのかという視点でも、当該期の土器生産・流通体制を検討する必要がある。さらに、この問題は日本古代律令国家の形成過程における儀式・礼法の受容・整備をはじめとするさまざまな要素とも連動するものであり、土器研究のみに留まらず、さらに広い視野をもって研究を進める必要がある。

## VI. まとめ

本稿では、以下のことを明らかにした。

- ① 百済泗泚期の有蓋台付椀の観察から製作過程の復元をおこない、風船技法による一体成形によって製作されたとする説が妥当と考えた。
- ② 百済の有蓋台付椀は、製作から使用の段階に至るまで、「蓋・身一体の組み合った形」に意味を見出し、重要視されていたことを明らかにした。そして、その形を得るために最適な方法として、風船技法が選択されたと考えた。また、「蓋・身一体の有蓋台付椀」は、盒形態をなす金属製の碗を模倣したものと考えた。
- ③ 7世紀代の日本・百済・新羅の都城出土土器をみると、有蓋台付椀を主体とする食器構成に転換する点が共通する。その一方で、各国の有蓋台付椀には「金属器をより忠実に模倣した百済」、「印花文により器面装飾を施した新羅」、「土師器と須恵器を交えた日本」という独自性もみられる。
- ④ 有蓋台付椀にみられる独自性は、視覚的要素に関わる部分に現れる。これは、共通の食事様式・食事作法を受容しながらも、各国の独自の論理によって食器の形や構成、階層制の表示方法などの諸要素が選択・付与されていたことが考えられる。

古代東アジアの土器、特に有蓋台付椀の展開には、隋・唐を中心とする世界の中に、日本・百済・新羅の各国がいかに独自性・自立性を保ちながら組み込まれていくのか、その過程

が反映されていると考える。各国の土器にみられる共通性と独自性を見出し、その背景を読み取ることこそ、古代東アジアの国際関係および各国のアイデンティティを探るうえで重要であると考え。今後もこの問題意識のもとに研究を進めていきたい。

百済・新羅において有蓋台付椀の受容が、漸進的であったのか、日本のように急激であったのか、これらは現在の資料状況では判断が難しい。今後、韓国でも一括資料に基づく、編年と定量的な分析により、土器様式転換のより詳細なプロセスが解明されることを期待する。

謝 辞 本稿を成すにあたって、国立扶余文化財研究所、国立扶余博物館、忠南大学校百済研究所には資料調査の便宜を図って頂いた。また、本研究を進めるにあたって、朴晟鎮氏をはじめとし、大韓民国国立文化財研究所の多くの方々の御協力を得た。深く感謝いたします。

また、以下の諸氏から協力と助言を得た。記して感謝申し上げます。

青木敬 諫早直人 李相俊 禹在炳 金ヒジュン 庄田慎矢 崔文禎 玉田芳英  
陳誠峻 寺井誠 馬場基 朴淳發 廣瀬覚 黄仁鎬 若杉智宏

以上にかかわらず、多々残った誤り・欠点はすべて筆者の責任に帰することを明記する。

なお、本研究の成果の一部は科学研究費若手研究（B）「古代東アジアにおける食器構成と食事作法の変化に関する比較研究（課題番号25770285）」に拠っている。

#### 註

- 1 小田裕樹「都城の土器と東アジア世界」『花開く都城文化』飛鳥資料館、2012年。小田裕樹「食器構成からみた「律令的土器様式」の成立」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所、2012年。
- 2 金容民「百済 泗泚期 土器에 대한 一考察」『文化財』31、文化財管理局、1998年。
- 3 金鐘萬「百済後期 土器器의 様相과 變遷」『国立博物館東垣学術論文集』第2輯、韓国考古美術研究所、1998年。金鐘萬「泗泚時代百済土器研究」書景文化社、2004年。金鐘萬『百済土器의 新研究』書景文化社、2007年。
- 4 朴淳發「熊津・泗泚期 百済土器 編年에 대하여」『百済研究』37、忠南大学校百済研究所、2003年。
- 5 山本孝文「百済 滅亡에 대한 考古学的 接近」『百済文化』32、公州大学校百済研究所、2003年。山本孝文「百済 台付椀의 受容과 變遷의 画期」『国立公州博物館紀要』4、2005年。山本孝文「百済 泗泚期 土器様式の 成立과 展開」『百済泗泚期文化の再照明』国立扶余文化財研究所、2006年。山本孝文「考古学から見た百済後期の文化変動と社会」『百済と倭国』高志書院、2008年。山本孝文「7世紀における土器様式の転換と東アジア」『史叢』第81号、日本大学史学会、2009年。
- 6 金容民「百済 泗泚期 土器에 대한 一考察」（前掲註2）。
- 7 金鐘萬「百済後期 土器器의 様相과 變遷」『国立博物館東垣学術論文集』第2輯、韓国考古美術研究所、1999年。金鐘萬「百済土器に見られる製作技法」『朝鮮古代研究』第3号、朝鮮古代研究刊行会、2002年。

- 8 蘇哉潤「台付椀에 관한 小考」『年報2002』国立扶余文化財研究所、2002年。
- 9 酒井清治「百濟 泗泚時代 台付椀의 製作技法」『泗泚都城』忠南大学校百濟研究所、2003年。酒井清治「百濟泗泚期の風船技法で製作された高台付椀」『土器から見た古墳時代の日韓交流』同成社、2012年。
- 10 金鐘萬「泗泚時代 灰色土器의 性格」『湖西考古学』9、湖西考古学会、2003年。同『泗泚時代百濟土器研究』（前掲註3）。
- 11 金鐘萬「百濟後期 土器의 様相과 變遷」、同「百濟土器に見られる製作技法」（前掲註7）。
- 12 金容民「百濟 泗泚期 土器에 대한 一考察」（前掲註2）。
- 13 酒井清治「百濟 泗泚時代 台付椀의 製作技法」、同「百濟泗泚期の風船技法で製作された高台付椀」（前掲註9）。
- 14 酒井清治「百濟 泗泚時代 台付椀의 製作技法」、同「百濟泗泚期の風船技法で製作された高台付椀」（前掲註9）。
- 15 酒井清治はこの仕上げナデ調整をロクロ削りの痕跡とみている（前掲註9）。器面の砂粒が動いていることから、削り痕跡と判断したかと思われるが、この調整の範囲は蓋・身の合わせ目を球体の曲面に沿うように幅広い範囲で施しており、粘土を削った際に生じる一定幅で稜線の単位をもつような直線的な削りの痕跡とは異なる。この点から、筆者は器面の乾燥が進んだ状態でのナデ調整であると判断した。
- 16 北野博司「須恵器の風船技法」『北陸古代土器研究』第9号、2001年。
- 17 忠南大学校百濟研究所『泗泚都城』2003年。
- 18 この数字は国立扶余博物館の管理番号を示す。出典は尹武炳『扶余官北里百濟遺跡発掘報告（Ⅱ）』忠南大学校博物館、1999年。
- 19 このとき、閉塞状態で変形させた可能性も考えられる。蓋の頂部が平坦で口縁部付近で屈曲する形態の有蓋台付椀は、閉塞状態で成形した方が容易に製作できる。日本における須恵器壺Kなどの場合は、このような製作技法がとられたと想定されている（平尾政幸「須恵器製作技法の検討にむけて」『古代の土器研究 須恵器の製作技法とその転換』古代の土器研究会、2001年）。
- 20 湿台とも表記する。ロクロの上に設置する筒状の道具で土器製作時の変形を防ぐための支えである。
- 21 合印は下から上に向けて施す。線の断面が鋭利であり、器面の乾燥状態がかなり進んだ状態で施されたかと判断する。この際、問題となるのは国立扶余博物館所蔵資料の身底部外面の「七」刻字である。この刻字は身を倒置した状態で書かれたものとみられる。刻字部分の粘土をみると、合印と同じく器面の乾燥が進んだ状態で書いたように観察できる点、刻字場所が合印の場所と近い点から、刻字も合印と一連の動作で記された可能性も考えられる。しかし、倒立した状態でないと「七」刻書は困難であることから、この段階では一時的に倒立させていた可能性がある。この場合製作工程上、不合理な感がある。身⑥-2の工程で刻書した可能性も考えられるが、器面の乾燥状態の観察所見とは矛盾する。刻書がいつの時点で記されたかについては問題が残る。他の観察事例を踏まえて今後の課題としたい。
- 22 北野博司「須恵器の風船技法」（前掲註16）。
- 23 金容民「百濟 泗泚期 土器에 대한 一考察」（前掲註2）。
- 24 金鐘萬『泗泚時代百濟土器研究』（前掲註3）。
- 25 山本孝文「百濟 台付椀의 受容과 變遷의 画期」（前掲註5）。
- 26 酒井清治「百濟 泗泚時代 台付椀의 製作技法」、同「百濟泗泚期の風船技法で製作された高台付椀」（前掲註9）。

- 27 毛利光俊彦「古墳出土銅鏡の系譜」『考古学雑誌』第64巻第1号、1978年。
- 28 桃崎祐輔「銅鏡蓋・銅鏡身・承盤」『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会・日本大学考古学会、2000年。桃崎祐輔「金属器模倣須恵器の出現とその意義」『筑波大学先史学・考古学研究』第17号、2006年。
- 29 毛利光俊彦「古墳出土銅鏡の系譜」(前掲註27)。
- 30 田村圓澄「百濟仏教史序説」『百濟文化と飛鳥文化』吉川弘文館、1978年。
- 31 日常的な食事の場ではなく、例えば百濟王と臣下、外交使節などとの儀式・饗宴の一環としての食事の場であろう。
- 32 西弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行会、1982年。脱稿は1974年。
- 33 西口壽生・玉田芳英「大官大寺下層土坑の出土土器」『奈良文化財研究所紀要2001』奈良文化財研究所、2001年。玉田芳英「大官大寺下層土坑出土の貯蔵器と煮炊具」『奈良文化財研究所紀要2002』奈良文化財研究所、2002年。
- 34 小田裕樹「都城の土器と東アジア世界」、同「食器構成からみた「律令的土器様式」の成立」(前掲註1)。
- 35 城ヶ谷和広「七・八世紀における須恵器生産の展開に関する一考察」『考古学雑誌』第70巻第2号、1984年。内山敏行「手持食器考」『HOMINIDS』1、1997年。内山敏行「匙・箸の受容と食器の変化」『野州考古学論攷』中村紀男先生追悼論集刊行会、2009年。
- 36 小田裕樹「都城の土器と東アジア世界」(前掲註1)。
- 37 山本孝文「7世紀における土器様式の転換と東アジア」(前掲註5)。小田裕樹「都城の土器と東アジア世界」、同「食器構成からみた「律令的土器様式」の成立」(前掲註1)。
- 38 金容民「百濟 泗泚期 土器에 대한 一考察」(前掲註2)、土田純子「泗泚様式土器에서 보이는 高句麗土器의 影響에 대한 검토」『韓國考古学報』第72輯、韓國考古学会、2009年。
- 39 重見泰『新羅土器からみた日本古代の国家形成』学生社、2012年。
- 40 宮川禎一「文様からみた新羅印花文陶器の変遷」『考古学と歴史学』高井悌三郎先生喜寿記念事業会、1988年。
- 41 山本孝文「印花文土器의 發生과 系譜에 대한 試論」『嶺南考古学』41、嶺南考古学会、2007年。
- 42 桜岡正信・神谷佳明「金属器模倣と金属器指向」『研究紀要』15、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、1998年。
- 43 重見泰「新羅土器形式分類の検討」『考古学論攷』第31冊、奈良県立橿原考古学研究所、2008年。
- 44 飛鳥時代の土器編年については西弘海の飛鳥編年(西弘海「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所、1978年。)による。なお筆者の飛鳥編年の理解については別稿を参照されたい(小田裕樹「土器群の位置づけについて」『奈良山発掘調査報告Ⅱ』奈良文化財研究所、2014年)。
- 45 西口壽生「5小結」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ』奈良国立文化財研究所、1995年。なお、須恵器杯皿の蓋もほぼ同容量である(小田裕樹「食器構成からみた「律令的土器様式」の成立」(前掲註1))。
- 46 西弘海「土器様式の成立とその背景」(前掲註32)
- 47 西本昌弘「元日朝賀の成立と孝徳朝難波宮」『古代中世の社会と国家』大阪大学文学部日本史研究室、1998年。森公章『遣唐使と古代日本の対外政策』吉川弘文館、2008年。
- 48 武田佐知子「古代国家の形成と身分標識」『古代国家の形成と衣服制』吉川弘文館、1984年。括弧内の引用は同論文240-243頁。

- 49 西口壽生・玉田芳英「大官大寺下層土坑の出土土器」(前掲註33)
- 50 森公章『「白村江」以後』講談社、1999年。森公章「倭国から日本へ」『日本の時代史3 倭国から日本へ』吉川弘文館、2002年。
- 51 小田裕樹「杯蓋の分類」、同「土器群の位置づけについて」『奈良山発掘調査報告Ⅱ』奈良文化財研究所、2014年。
- 52 小田裕樹「都城の土器と東アジア世界」、同「食器構成からみた「律令的土器様式」の成立」(前掲註1)

挿図出典

- 第1図 註9文献を下図とし、筆者の観察をもとに改変し作成。
- 第2図 筆者撮影。
- 第3図 註16文献より転載。
- 第4図 註17文献より転載。
- 第5図 筆者作成。
- 第6図 1・2・8：註28文献、3～7：註27文献より転載。
- 第7・8図 註1文献より転載。
- 第9図 第1・8図、国立慶州文化財研究所『慶州皇南洞新羅建物址』2003年より転載。

고대 한일 유개대부완의 제작과 전개  
-백제 사비기의 자료를 중심으로-

小田 裕樹 (오다 유우키)

요 지 본고에서는 일본의 고대 「울령적 토기양식」의 성립에 있어서 영향이 강했다고 지적되는 백제 사비기의 유개대부완을 대상으로 제작기법의 분석을 행하고, 백제·신라의 도성 출토토기와 일본의 토기를 비교, 유개대부완의 수용에서 보이는 공통점과 차이점에 대해 검토하였다.

사비기의 유개대부완을 관찰한 결과, 우선 점토띠를 쌓아 올려 球體를 만들고, 개부·신부로 분할하여 각각을 만들어 올린 후, 다시 짜 맞춰 마무리 조정을 행하여 완성시키는 제작공정을 복원할 수 있었다. 이와 같은 유개대부완의 제작방법은, 제작자 및 주문자 그리고 공급처의 사용자가, 「개·신 일체의 조합형」에 의미를 찾고, 이 형태를 얻기 위해 가장 효율적인 제작기법을 선택한 결과라고 판단된다. 그리고 이 개·신이 조합된 형태는 불기(佛器)인 금속제의 완을 모방했을 가능성이 높다고 생각했다.

7세기대의 일본·백제·신라의 토기를 볼 때, 모두 유개대부완을 주체로 하는 식기구성으로 전환한다. 중국에서 유래된 향연·의식의 장소에서의 식사에 관련한 공통의 예법을 각국이 수용한 것과 관련하여, 대부(臺付)식기를 대(臺)의 위에 놓고, 젓가락·숟가락을 사용해 먹는 공통의 식사작법이 각국에 전해져, 수용된 것을 나타낼 가능성이 크다고 생각하였다.

한편 「금속기(金屬器)를 보다 충실히 모방한 백제」, 「인화문으로 기면(器面)장식을 베푼 신라」, 「土師器와 須惠器를 섞은 일본」과 각국의 식기의 시각적 요소에 독자성이 나타나 있음을 찾아냈다. 공통의 식사양식·식사작법을 수용하면서 각국 독자의 논리에 따라 식기의 모양이나 구성 등의 제 요소가 선택·부여되었음이 고려된다.

주제어 : 유개대부완, 풍선기법, 식기구성, 시각적 요소, 비교연구

## Production and Development of Lidded Pedestaled Bowls in Ancient Japan and Korea: Centering on Materials of the Baekje Sabi Period

Oda Yūki

**Abstract:** This contribution takes as its object the lidded pedestaled bowls of the Baekje Sabi period, which have been pointed out as strongly influencing the establishment of the “ritsuryō-type pottery style” of Ancient Japan, and conducts an analysis of its techniques of production, and then from a comparison of materials recovered from the ancient capitals of Baekje and Silla with Japanese ceramics, examines the points of commonality and difference in the adoption of lidded pedestaled bowls.

As a result of observations made of Sabi period lidded pedestaled bowls, it was possible to reconstruct the process of production as starting with the making of a spherical form by piling up clay coils, and after dividing this into lid and body portions and fashioning these separately, reassembling them and making finishing touches and adjustments to complete the item. This mode of manufacture is considered to result from the maker, and those who order these items and those who use them where they are supplied, seeing significance in “the combined shape of the body and lid fitted together,” and the most efficient technique of production for achieving this shape being chosen. Further, this shape of the body and lid fitted together is thought very likely to be imitation of the round metal bowl of Buddhist paraphernalia.

Looking at the seventh-century ceramics of Japan, Baekje, and Silla, in each case there is a transition to a composition of vessels having the lidded pedestaled bowl as main item. This is thought related to each country adopting a common set of etiquette connected with meals in banquet and ritual contexts deriving from China, with pedestaled dishes being placed atop trays, and eating with chopsticks and spoons as a common set of table manners that was most likely transmitted to and adopted by each country.

At the same time, it was found that individuality appeared in each country with respect to the visual aspects of tableware, with “Baekje more faithfully imitating metal utensils,” “Silla applying decoration to vessel surfaces using a stamped design,” and “Japan mixing together Haji and Sue ware.” Thus even while adopting common styles of eating and etiquette, it is thought that each country chose or added various elements to the shapes and compositions of tableware according to its own logic.

**Keywords:** lidded pedestaled bowls, balloon technique, tableware composition, visual aspects, comparative research